

Research Institutes

研究所・教育研究施設

研究所が大学院教育に 果たす役割

76	化学研究所
77	人文科学研究所 / 再生医科学研究所
78	エネルギー理工学研究所 / 生存圏研究所
79	防災研究所 / 基礎物理学研究所
80	ウイルス研究所 / 経済研究所
81	数理解析研究所 / 原子炉実験所
82	霊長類研究所 / 東南アジア研究所
83	i P S細胞研究所 / 教育研究施設
84	教育研究施設 / 協力講座一覧

京都大学には、我が国の学術研究の中核的研究拠点として各学術分野を牽引する 14 の附置研究所が設置されています。これらの研究所は、基本的には研究面の活動を主体としていますが、大学院研究科との協力の下、最先端の研究環境を活かして優れた若手研究者の養成に取り組んでいます（協力講座）。

各研究所において大学院学生として教育を受けることを希望される場合は、それぞれの協力講座を開講している大学院研究科に問い合わせ、受入状況をご確認ください。

化学研究所

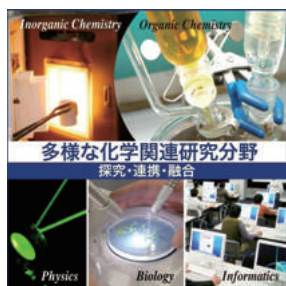


化学研究所（以下、化研）は、化学を物質研究の広い領域として捉え、物質に関する真理を究明するとともに、時代が求める諸課題の解決にも資する研究を行っています。このような立場で 2010 年度から、「化学関連分野の深化・連携を基軸とする先端・学際研究拠点」として他大学・研究機関と多彩な共同利用・共同研究を推進し、一方、国内 3 大学と「統合物質創製化学推進事業」による研究連携を密にしています。また、これまでに採択された化学系、物理系の 3 件のグローバル COE プログラムや「世界トップレベル国際研究拠点形成促進プログラム・iCeMS」にも、中核部局の一つとして積極的に関わっています。

化研の高い研究活性は、物理学、生命科学、情報科学に跨る広い化学関連分野をカバーする 31 の研究室（研究領域）が進めてきた先鋭的基礎研究、研究室相互や他部局・他研究機関と推進してきた学際・融合研究を反映しています。また、化研では海外研究機関との部局間交流協定（現在 64 件）などに基づく人的交流も盛んで、世界でも化学関連分野の先端研究の一つの核となっています。



化研の 31 の研究室は、理学、工学、農学、薬学、医学、情報学、人間・環境学の 7 研究科 12 専攻にわたる「協力講座」となっていて、約 200 名の大学院生（うち外国人留学生約 20 名）のきめ細かい指導に当たり、広い視野を持つ世界ト



Institute for Chemical Research

» http://www.kuicr.kyoto-u.ac.jp/index_J.html

プレベルの研究者の育成に努めています。その一環として、研究室や研究室をまたぐセミナーなどに加え、化研の大学院生が分野を越えて互いの研究内容を認識・参照する場としての大学院生研究発表会、化研全体の年次報告に当たる研究発表会を毎年開き、また、招へい外国人研究者との意見交換・交流の場であるセミナーやシンポジウムも多数（2013 年度は 45 回）開催しています。さらに、やはり化研を挙げての事業として、大学院生に対して、国際会議での研究発表のための短期海外渡航を奨励するとともに、研究滞在を目的とする中長期海外派遣も力強く支援しています（2013 年度は、それぞれ 28 件、11 件）。

菅 大介 准教授

（附属元素科学国際研究センター無機先端機能化学研究領域）

遷移金属と酸素から成る酸化物は、高温超伝導や強誘電性などの多くの有用な機能を示します。酸素を介した遷移金属間の結合を基礎とした 3 次元格子が、酸化物の格子骨格となり、機能性を決定する電子状態の発現の舞台となります。私は、格子骨格の最小構成要素である、遷移金属を中心とした酸素八面体や四面体（その大きさは 0.4 ナノメートル程度）を積み木のように自在に積層し、原子レベルで酸化物を設計・構築することで新しい機能性の探求を行っています。



化学研究所には研究領域を跨いだ研究が実施可能な環境が備わっています。実際、最先端の走査型透過電子顕微鏡を利用して、自身で設計・構築した酸化物中の原子配列の観察を行っています。最近では、遷移金属をつなぐ酸素原子の直接観察にも成功しています。このような研究領域の垣根を越えて最先端の研究を行える環境は、実は非常に稀なものです。あなたも化学研究所で有意義な研究生活を送ってみませんか？

人文科学研究所

Institute for Research in Humanities

» <http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/>

研究

人文科学研究所は、人文社会系の大学附属研究所としては国内最大規模のもので、現在は文化研究創成、文化生成、文化連関、文化表象、文化構成の五研究部門と、東アジア人文情報学研究センター、現代中国研究センターの二附属研究施設から構成されています。人文科学研究所は人文科学分野において学際的共同研究の手法をいち早く取り入れました。現在も28の共同研究班において、「複雑化・多様化した現代社会において、人文科学が果たす役割は何か」という問題を多様な角度から探究しています。2010年度からは文部科学省の認定による共同利用・共同研究拠点「人文学諸領域の複合的共同研究国際拠点」として、課題を公募する共同研究などの活動を推進しています。



教育

人文科学研究所は、次世代の研究者を育成する教育活動にさまざまなかたちで力を注いでいます。

- 全研究部門および附属研究施設から27名の教員が、文学研究科の協力講座において大学院教育にあたっています。また、協力講座に準ずるかたちで教育学研究科人間・環境学研究科(共生文明学専攻文化人類学)、アジア・アフリカ地域研究研究科において講義と学生指導を担当しています。
- 地球環境学・学舎においては、「両任制」流動教員(1名)を務めています。

- これら以外にも、文学研究科や経済学研究科において、大学院授業担当のかたちで多数の教員が教育にあたっています。
- さらに特筆すべきは、学内外の博士後期課程以上の学生を共同研究班員として受け入れ、実践的研究活動に参加する機会を提供していることです。領域を異にする多数の専門研究者が参加する共同研究の場を通じて、精緻な文献研究、フィールドワークなど、多様な研究方法と学際的視野をもつ若手研究者を養成することに努めています。また、ポスドク研究者を研修員などとして受け入れ、活躍の機会を提供しています。

川本 直美 さん

博士後期課程2年
(人間・環境学研究科・共生文明学専攻)

私の専門分野は文化人類学です。人類学の主な手法は調査地に長期滞在し、人々とともに暮らすことを通じて、彼らの生の営みを観察するフィールドワークです。私はメキシコ西部村落で行われているカトリックの祭礼を中心とした、人びとの宗教実践について研究しています。博士課程進学後は、人文科学研究所主催の共同研究にも参加してきました。共同研究は文化人類学だけでなく、社会学・心理学・歴史学・地理学・精神分析学など専門の異なる研究者によって学際的に行われており、そこに参加することで地域や専門分野の垣根を越えた研究者の方々と交流することもできます。また、人文科学研究所は研究者だけでなく広く一般市民に向けたシンポジウムも頻繁に開催しています。これらの機会は、フィールドワークで得た知見や問題意識を多角的な視点から考えていく場として、そして自らの成果を社会に還元していく場としても最適な環境といえます。



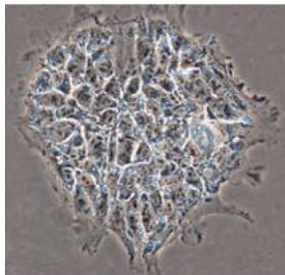
再生医科学研究所

Institute for Frontier Medical Sciences

» <http://www.frontier.kyoto-u.ac.jp/>

研究

再生医科学研究所は、我が国初の「再生医科学」を冠した研究所として設立され、現在、5研究部門、2附属施設からなる27研究室で構成されています。現在、研究所で行われている研究には、大きく分けて①ヒトES細胞、iPS細胞、体性幹細胞等を使用した幹細胞研究②神経・筋・骨・血液など再生医学の主な標的となる組織の発生・再生機構に関する医科学基盤研究③自己組織再生の「場」を形成するため、数々の生体組織代替材料、免疫隔離膜、人工細胞外基質、成長因子徐放システムの開発などの組織工学研究④自家間葉系幹細胞を用いた骨再生治療などの臨床応用研究があります。



本研究所の特色は、基礎医学・基礎生物学の知見を踏まえ、工学—再生医療、幹細胞医科学—再生医療の明確なベクトルを持った研究を展開し、基礎研究から再生医療の実現への医学・工学・理学出身者による学際的、融合的研究を進めていることです。

2008年10月に文部科学大臣より共同利用・共同研究拠点「再生医学・再生医療の先端融合的共同研究拠点」に認定され、本研究所に集約された再生医学の知識・技術を基に、多様な先端的共同研究を推進するとともに、再生医学研究・再生医療を積極的、意欲的に担う研究者の教育・育成に努めています。

教育

教育面では、再生医学、再生医工学の高度な研究を通じて教育により、再生医学の研究者、医療従事者、また新たな医療産業の担い手となる人材の育成を行うことを理念としています。

前述のように本研究所では、医学・工学・理学出身者による学際的、融合的研究を進めていることに関連して、大学院医学研究科、工学研究科、理学研究科及び生命科学研究科の協力講座として大学院生の教育を行っており、医学・工学・理学・生命科学の内の1つに高い専門性を持ち、且つ、それら4つの領域を全般的に理解し、広い視野で研究・開発を遂行できる研究者・技術者を養成することを教育目標に掲げています。

金 永輝 さん

研究員
(再生医学応用研究部門組織再生応用分野)

私が所属する組織再生応用分野研究室では、体を支えたり、動かしたりする機能を担っている骨、軟骨、神経、筋肉の病気の基礎研究を行っています。外傷、老化、遺伝子疾患、癌などによって起きた疾患の中で、今の治療法では機能を戻すことができない困難な病態に対して、私たちは再生医学の知識、技術を活用して新たな治療法を開発することを目指しています。私は骨細胞、軟骨細胞、脂肪細胞など様々な細胞に分化できる間葉系幹細胞の細胞生物学的研究に取り組んで来ました。研究を経て表面マーカーや培養条件が同定できれば、iPS細胞から性質がとても良い、安全な間葉系幹細胞を無限に得ることができます。当研究室には、肉腫の起源細胞の解明や発生にどのような遺伝子異常が関与しているかを解析しているメンバーや、難治性骨軟骨疾患をiPS細胞で再現し、分子機構の解明に挑戦しているメンバーもいます。分野を超えたディスカッションや議論ができます。



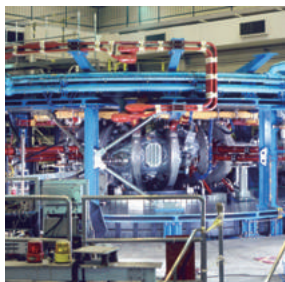
エネルギー理工学研究所

Institute of Advanced Energy

▶▶ <http://www.iae.kyoto-u.ac.jp/>

研究

エネルギー理工学研究所は、エネルギーの生成、変換および利用の高度化に関する研究を行うとともに、全国の大学その他の研究機関研究者の共同利用に供することを目的とし、現代社会における最大の課題のひとつであるエネルギー問題の解決を目指した研究を行っています。在籍する教員・研究者の学術基盤は、理学や工学の多岐の分野にわたっています。これら多様な分野の有機的な連携・融合を通して、環境調和性に優れ、社会的受容性の高い新規エネルギー源およびエネルギー有効利用システムの実現を目指す新たなエネルギー理工学の研究領域の開拓を進めています。現在は、核融合や太陽光によるエネルギーなどを目標に、重点複合領域研究として「先進プラズマ・量子エネルギー」と「光・エネルギーナノサイエンス」を推進しています。また、2011年度から、文部科学省から認定を受けた「ゼロエミッションエネルギー研究拠点」として国内外の研究者の共同利用・共同研究を進めており、国内外の多くの共同研究者に、本研究所の特徴ある大型実験装置をはじめ、様々な先端的な研究設備や装置群が活用されています。また、2013年度からは特別経費プロジェクト「革新的高効率太陽光利用技術の開発」を開始しています。



教育

本研究所の全ての研究分野は、エネルギー科学研究科の協力講座として大学院教育に参画しており、毎年70-100名の学生が本研究所で指導を受けています。特に、多くの博士後期課程学生を擁し、中でも外国人学生の割合が高く、国際的に開かれた研究所となっています。これまで、グローバルCOEプログラム「地球温暖化時代のエネルギー科学拠点」で行って

羽田 和慶さん

博士後期課程3年

(エネルギー科学研究科・エネルギー変換科学専攻)

核融合炉発電では、水素ガスをプラズマの状態にし、磁場を用いてドーナツ状の真空容器内に閉じ込め、加熱することで核融合を起こし、アルファ粒子と中性子を用いて発電を行います。私は、プラズマを作るのにどのような運転条件が有効であるのかを明らかにするため、数値解析モデルを用いた研究を行っています。フランスのサン・ポール・レ・デュランスという場所に国際熱核融合実験炉（ITER）という超大型の装置が国際協力によって建設中であるなど、核融合発電は最もホットな研究分野の一つです。京都大学にも、ヘリオトロンという中型の装置があり、さまざまな加熱装置・測定機器を用いて、プラズマの特性が調べられています。中型といっても、大学生・大学院生が扱うものの中では非常に大きな装置です。毎週、月曜日には、前週に得られたデータに関しての議論や今週の運転方針に関する打ち合わせなど、エキサイティングな研究生生活を送っています。



生存圏研究所

Research Institute for Sustainable Humansphere

▶▶ <http://www.rish.kyoto-u.ac.jp/>

研究

生存圏研究所は2004年4月に設立された研究所です。その目的は人間生活圏、森林圏、大気圏、宇宙空間圏を人類の「生存圏」として組織的・包括的に捉え、それらの診断・解析を行うと同時に開拓・創成する先進的技術開発を促進し、総合科学としての「生存圏科学」を確立することにあります。これを効率よく遂行するため、「環境計測・地球再生」「太陽エネルギー変換・利用」「宇宙環境・利用」「循環型資源・材料開発」という4つのミッションを定めて、分野横断的な研究を推進しています。また萌芽的研究の発掘にも力を入れています。当研究所は、2010年度からは「生存圏科学の共同利用・共同研究拠点」としての活動を開始しました。研究施設・設備の全国・国際共同利用や、生存圏科学のデータベース構築とデータ配布、それらを活用した国際共同研究を推進しています。



教育

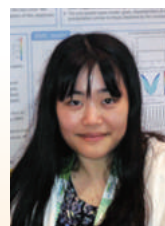
生存圏研究所は、農学、工学、情報学、理学と広範な研究分野の背景を持った教員による分野横断的な学際教育を通して、持続的社会的構築に深く関わる生存圏の科学を担う多彩な人材育成に取り組みます。また全国・国際共同利用に供される最先端の研究設備・データベースを利用した研究に接することを通して、総合的な知識と俯瞰的かつ国際的な視野をもって生存圏の科学の発展に寄与する研究・教育者を育成します。協力講座として参加す

久保田 結子さん

修士課程2年

(工学研究科・電気工学専攻)

私は現在宇宙空間の中でも人類がロケットや衛星等の宇宙機で到達できる範囲の高エネルギープラズマ環境を、研究所が運用しているスーパーコンピュータを駆使してシミュレーションにより検証しています。生存圏研究所は多方面の研究室から成り立っており、セミナーや発表会を合同で行っています。そのため人類が抱える様々な現状の問題点やそれに対する取り組みを知ることができ、『人類が持続的に存在、活動してゆくために何が必要か?』といった研究者として社会に貢献するために考えなくてはならない根本的な問題を視野広く意識できます。また第11回アジア・大洋州地球科学会(AOGS)のポスターセッションではBest Student Poster Awardを頂きました。それは生存圏研究所では国際共同研究が盛んであり、世界で行われている最新の研究内容を海外からの来訪者から学べ、日常的に英語で議論する機会に恵まれたからだと思っています。



防災研究所

Disaster Prevention Research Institute

<http://www.dpri.kyoto-u.ac.jp/>

研究

防災研究所は、自然科学から人文・社会科学にわたる災害学理の追求と、防災学の構築に関する総合的な研究に取り組んでいます。災害と防災に関わる多種多様な課題に対して、災害学理の追求を目指した基礎研究を展開するとともに、現実社会における問題解決を指向した実践的な研究を実施し、安全・安心な社会の構築に貢献すべく、約 100 名の研究者と 200 名の学生が日々研究に取り組んでいます。研究対象は地震津波、火山噴火、地盤災害、洪水・渇水などあらゆる自然災害であり、学問領域は自然科学、人文・社会科学、工学、情報学などの領域にわたり、防災研究を標榜する大学附置の研究所としては、世界屈指の規模と研究の水準を誇っています。また、防災研究所は、自然災害に関する総合防災学の共同利用・共同研究拠点として認定されており、重点研究課題として、(1)南海トラフ地震など巨大地震・津波、火山噴火対策研究、(2) 気候変動・極端気象に関する適応策研究、(3) 国際防災実践研究を掲げ、国内外の研究機関との共同研究も積極的に進めています。



教育

防災研究所は理学研究科、工学研究科、および情報学研究科の協力講座として、大学院教育を担っており、3 研究科あわせて約 200 名の大学院生が学んでいます。先端のかつ学際的な防災研究に結びついたセミナーや、最先端の実験装置

を用いた実験や解析、現地調査・フィールドワークなど、防災研究所ならではの学びができます。外国人客員教授や、国内外の第一線研究者達による特別講義も大きな魅力です。さらに 2011 年度からは、博士課程教育リーディングプログラム「グローバル生存学大学院連携プログラム」、大学の世界展開力強化事業「強靱な国づくりを担う国際人育成のための中核拠点の形成」にも参画しています。世界の英知に触れながら、研鑽をつむことができるプログラムとなっています。防災研究所はこのような活動を通じて、次世代を担う人材の育成に務めています。

中居 楓子 さん

博士後期課程 1 年
(情報学研究科・社会情報学専攻)

私の所属している研究室では、災害による経済的・人的被害をできる限り小さくする「減災」に主眼をおき、主に経済学的・情報学的な視点から、理論、実証、実践に基づいた研究をおこなっています。

私は、津波災害から命を守るための方策のひとつである、避難に関する研究をしています。2012 年に内閣府から発表された南海トラフ巨大地震の想定では、一部の沿岸地域に、地震発生後から数分で 30m を超える巨大津波が到達する可能性が示されました。私の研究は、「巨大災害に対し我々は絶望するしかないのだろうか？」という問いにはじまり、それに「No」という答えを出すための手法を探るものです。現在は、コンピュータを用いた津波避難シミュレーションと現場での実験を通じて、地域の地形、人工構造物、人の行動を組み合わせ、命を守る可能性を作り出す方法を住民と共に模索しています。

研究所では、国内外の先端を行く研究者と出会う機会や、同じ分野の学生との自主ゼミがあり、とても刺激的ですが、私にとっては、現場で出会う多くの人や現象もまた師であり、研究の原動力となっています。



基礎物理学研究所

Yukawa Institute for Theoretical Physics

<http://www.yukawa.kyoto-u.ac.jp/>

研究

素粒子論では、自然界の最も基本的な粒子やその間に働く 4 つの力を研究しています。強い力、弱い力、電磁気力を統一するゲージ理論が確立されつつあります。重力の量子論としては、素粒子を一次元的な紐とみなす超弦理論による研究が盛んです。原子核理論では、強い力を担うハドロンとその集まりである核子や原子核の構造・性質を研究しています。統計・固体物理学では、巨視的物質の持つ様々な興味ある性質(超伝導、超流動など)を基本的な力と、多数の粒子の効果から説明することが目的です。非平衡開放系での物質の運動状態や相構造の解明も重要な課題です。宇宙・天体物理学では、銀河や宇宙スケールの現象を、一般相対論と素粒子論に基づいて解明することを目指します。宇宙の創成、ブラックホールの物理なども大きな課題です。



本研究所では、非常勤研究員等を積極的に受け入れています。また、多くの外国人研究者が長期・短期に訪れ、年間 100 を超える研究所セミナーの約半数は外国人研究者によるもので、国際的センターの役割を果たしています。

教育

基礎物理学研究所は、大学院理学研究科物理学・宇宙物理学専攻の協力講座として、大学院教育を担っており、理論物理学の四つの基礎的諸分野である素粒子論、原子

核理論、統計・固体物理学、宇宙・天体物理学の大学院生(修士・博士後期課程)を毎年十数名受入れています。この四つの学問分野は、扱う対象の特徴的な大きさの尺度に対応しており、極微の世界(素粒子論)、原子の中心にある原子核程度のもの(原子核理論)、日常生活で遭遇する様々な物質(統計・固体物理学)、銀河や銀河団から宇宙そのもの(宇宙・天体物理学)です。23 人の教師陣が基礎的な講義から最先端の話題を含めた演習まで幅広いメニューを用意しています。外国人客員教授や、国内外の第一線研究者達による集中講義も大きな魅力です。

兵藤 哲雄 助教

(物質構造研究部門)

基礎物理学研究所では、理論物理学の全ての分野の研究者が集まり、様々な自然現象を解明するためにセミナーや国際研究会で活発な議論を行っています。私の専門分野である原子核理論は、自然界の 4 つの力のうち強い力による物理現象を研究対象としています。強い力は量子色力学という理論を基礎としていると考えられていますが、現実世界を全て量子色力学から理解するには至っておらず、現在でも様々な手法で研究が行われています。特に、クォークの閉じ込めと呼ばれる現象は、解決に 100 万ドルの賞金がかけられるほど難しい問題として知られています。

原子核物理を研究対象としていても、実際の研究で他の理論物理学分野と関係した議論が必要になる場合があります。例えば、私自身の最近の研究で、湯川秀樹が提唱したパイ中間子を 3 つ集めて起こる現象について、物性物理学の冷卻原子気体の研究で使われている手法を用いて解析を行いました。基礎物理学研究所では異なる分野の研究者とも日常的な議論ができるので、幅広い視野で研究を行うのに理想的な環境です。



ウイルス研究所

研究

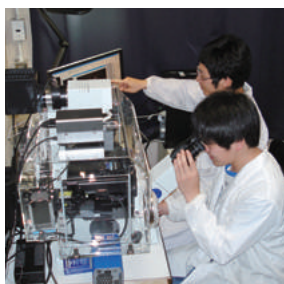
ウイルス研究所は1956年に設立されて以来、病気の原因としてのウイルスの研究とともに、ウイルス研究の基盤として、生命の謎を解き明かす研究に携わってきました。その過程で、我が国の分子生物学研究に中心的な役割を果たし、また新たなウイルスを発見するなど、基礎から応用研究に至るさまざまな貢献をしてきました。

本研究所は「ウイルスなどの感染症による脅威を取り除き、安心した社会の構築に寄与する」「ウイルスの研究をさらに深め細胞および個体レベルの生命現象を理解する」「免疫・神経系などの高次生命現象を理解し、ウイルス疾患を明らかにし、かつ予防する」等を目的とした研究を行っています。

教育

ウイルス研究所は、基礎生物学から医学にわたる多様な分野の研究者が在籍して研究・交流をしており、大学院教育においても5つの研究科(医学研究科、生命科学研究科、理学研究科、薬学研究科、人間・環境学研究科)を通じて多数の学生を受入れています。当研究所に所属する大学院生は学術交流会(所内行事)や国際学生セミナー(生命科学研究科との共催)などの行事を通して様々な異分野の研究に接する機会があります。

さらに、平成22年度からは、「ウイルス感染症・生命科学先端融合



Institute for Virus Research

▶▶ <http://www.virus.kyoto-u.ac.jp/>

的共同研究拠点」として共同利用・共同研究拠点となりました。当研究所はこのような非常にユニークな研究環境を生かして次代を担う世界トップレベルの研究者を育ててきました。今後とも、異分野交流を活発に進めることによって、研究・教育に大きな貢献をしていきたいと考えています。

渡邊 直希 さん

博士課程4年
(医学研究科・医学専攻)

ウイルス研究所ではウイルス及びウイルス疾患の研究をはじめ、幅広い視点から生命科学領域の融合的な研究を行っています。私の所属する増殖制御学研究分野では、マウスを用いて神経発生、体節形成、短周期の生物時計及び成体脳のニューロン新生に関する基礎研究を進めています。その中で私は大脳皮質形成期における神経幹細胞の分化制御機構を研究しています。ウイルス研究所には異なる5研究科に所属する大学院生が在籍していることもあり、研究科や研究室の異なる学生であっても交流があり、互いに切磋琢磨しています。また、所内行事も盛んで、春には新入所者歓迎会及びソフトボール大会、年末には学術交流会及び忘年会が行われ、研究所内の様々な研究領域の方々と交流を深めています。さらに国内外の研究者を招待して、学術講演会やセミナーが定期的に開催されており、幅広い分野の最先端の研究成果に触れることができます。



経済研究所

研究

経済研究所は、1962年創立以来、理論経済学および応用・実証研究の両面において、先端的な経済学研究に携わってきました。当研究所は、2010年度から「複雑系経済学」と「経済戦略と組織」という中心テーマを掲げて、基礎研究に力点を置く国際的共同研究拠点活動を展開しています。

研究テーマの柱の一つをなす「複雑系」という考え方は1960年代から自然科学や工学で発展し、物の見方を一新させた分析手法です。当研究所は、この手法を世界に先駆けて取り入れ、経済学研究を先導してきました。

もう一つのキーワード「経済戦略」は、多くの日本人が戦略的思考を苦手とし、我が国の発展を阻んでいるという問題意識の上に成り立っています。日本人が本当の意味での戦略的思考法を身につけ、組織設計を行える社会を形成しなくてはなりません。「経済戦略と組織」というテーマは、そのための基礎づくりを目指したものです。現在、当研究所はこうした研究方法から経済危機や災害復興の経済分析に挑戦しています。

基礎研究は現実の経済とは大きな隔たりがあると感じる方もいるかもしれませんが、欧米では、最先端の経済学研究が実生活にどんどん取り入れられています。私たちは基礎研究こそが、経済社会を根本から変革していく近道と考えています。

教育

経済研究所は大学院生・若手研究者などの教育にも積極的に関わり、多くの一流研究者を育ててきました。当研究所は大学院経済学研究科の「協力講座」となっていて、先



Institute of Economic Research

▶▶ <http://www.kier.kyoto-u.ac.jp/>

端的な研究を基礎にして多くのコア科目を担当するとともに、60名ほどの大学院生にきめの細かい研究指導を行い、国際的に通用する研究者の育成に努めています。また、日本学術振興会特別研究員、非常勤研究員、招へい外国人学者・外国人共同研究者等として、内外の若手研究者も広く受け入れ、その多くは研鑽を経て主要大学の教員として巣立っており、研究者の養成機関としても当研究所は高い評価を受けています。大学院生、若手研究者には、当研究所の研究資源、多くのセミナー、ディスカッション・ペーパーを開放するとともに、外国の教育機関との交流や外国人客員教員などで国際的な教育機会も提供しています。

山脇 大さん

博士後期課程1年 / 経済研究所 RA
(経済学研究科・経済学専攻)

私の専門分野は比較経済学です。比較経済学は、社会主義経済システム崩壊後の市場経済システムへの移行過程の多面的分析を通じ、世界経済における経済システムの多様性及びその国際比較に関わる分析手法・視座を提供しています。私は研究室において、天然資源のガバナンス構造に関わるアクターや制度の国際比較を研究テーマとして設定しており、その中でもグローバル化と経済統合の流れの中で独自の市場を形成しつつある、資源リッチな移行経済諸国のロシアや中東欧に分析焦点を当て、研究を進めています。

経済研究所では、国内外問わず第一線で活躍される先生方の下、最先端の経済学研究を学ぶ機会が多くあります。非常に密な研究指導は勿論のこと、講演会や研究会に大学院生も参加が可能であり、そこで世界トップレベルの研究者の発表・議論に触れることができ、また交流を通じて将来に向けた人的ネットワークを形成することもできます。加えて、経済研究所RAとして研究補助に携わることで、最先端の研究手法や研究への真摯な姿勢もまた実践を通じて修得できる等、非常に理想的な環境です。



数理解析研究所

Research Institute for Mathematical Sciences

▶▶ <http://www.kurims.kyoto-u.ac.jp/>

研究

数学・数理解析の基礎的研究を推進することが本研究所の目的です。このため、所員による自由な発想と思考に基づく研究活動を活発に推進することは勿論ですが、全国の数学・数理解析研究者のための共同利用・共同研究拠点の事業を実施するとともに、国際研究拠点として国際共同研究を推進しています。毎年 80 件以上の研究集会等を開催し、300 人以上の海外研究者が来訪しています。平成 22 年度からは数学・数理解析の先端的共同利用・共同研究拠点として新たな事業を展開しており、平成 26 年度からは量子幾何学研究センターの活動も本格的になっています。このように、本研究所は国内的にも国際的にも卓越した研究拠点として中心的な役割を果たしています。

本研究所の取り組む研究分野は、純粋数学から応用数学、数理解析学、そしてコンピュータ・サイエンスに及んでおり、基礎から応用まで幅広く、相互に有機的な関連をもち、その相互作用により新しい研究領域ならびに研究成果が生み出されています。

教育

本研究所は、大学院理学研究科、数学・数理解析専攻、数理解析系として、学生入学定員修士課程 10 名、博士後期課程 10 名を対象に、数学・数理解析の進歩を担う独創的な研究者の養成を目的とした教育を行っています。担当教員が、その研究分野に関して開講する授業（講義及びセミナー研究）によって、少人数指導で教育を行うのが、本研究所の教育の特徴です。

また、学生が研究所で開催される研究集会に参加し、来訪研究者と交流を持ち、最先端の研究に接することができることも、大きな利点



なっています。平成 26 年度にスーパーグローバル大学等事業に採択され、数学・数理解析専攻では現在スーパーグローバルコースの設置準備を進めています。また、フィールズ賞受賞者等の世界トップレベルの研究者を特別招へい教授として任用し、英語による講義等を実施しています。

その他に、国内外の若手研究者（博士の学位を取得した者）を、研究員や日本学術振興会の特別研究員として受け入れています。

これらの若手研究者は、所員や来訪研究者との研究交流を行ったのち、各大学の教員として巣立っており、本研究所は研究者養成機関としての役割を担っています。

望月 拓郎 教授

（基礎数理解析部門）

私は調和バンドルやツイスター D 加群と呼ばれる対象を調べることで、ある種の代数的な線形偏微分方程式が持つ興味深い性質を研究してきました。

代数解析学や大域解析学といった独立に発展していた分野が、調和バンドルの特異性の研究を通じてうまくつながったところに、不思議な面白さを感じます。

最近では、これまでの研究で得られた知見を、インスタントンやモノポール、量子 D 加群といった数理解析学的な対象に応用することを試んでいます。

それほど大したことをしているわけではなくても、自分にとって新しい世界が目の前に現れると喜びを感じますし、そこに乗り出していく時にはワクワクします。実際には長くて困難な道のりが待っている、とわかってはいるのですが。

学生の皆さんにも、自分自身で研究を企て、推し進めていく愉悅を味わってほしいと思っています。そして、そのための力を養っていかれることを願っています。



原子炉実験所

Research for Reactor Institute

▶▶ <http://www.rri.kyoto-u.ac.jp/>

研究

原子炉実験所は、昭和 38 年の設立以来、全国大学等の共同利用研究者に対して、大学の持つ原子力施設としては国内最大の研究用原子炉(KUR)を中心に、臨界集合体実験装置(KUCA)やコバルト 60 ガンマ線照射装置などを提供（平成 22 年度からは、共同利用・共同研究拠点として事業を開始）しています。年間延べ数千人の研究者や学生などが来所しており、理学、工学、農学、医学などの多方面にわたる研究が行われています。

また今日、原子力利用の各分野において大学の果たす役割への期待が益々高まっており、本実験所が培ってきた共同利用研究の実績の評価に基づき、極めて大きな期待が寄せられています。

本実験所では、このような期待に応えるべく、KUR などの諸施設を有効に利用した核エネルギー、放射線・粒子線を用いた特徴的研究を展開しております。さらに、本実験所では固定磁場強集束型 (FFAG) 加速器を KUCA と結合させた加速器駆動未臨界システムの基礎研究を世界に先駆けて開始するとともに、世界を牽引するべく、ホウ素中性子捕捉療法 (BNCT) によるがん治療の基礎・応用研究を進展させております。

教育

原子炉実験所の教員は、研究分野として工学研究科、理学研究科、農学研究科、医学研究科、エネルギー科学研究科の協力講座を担当して、大学院の講義や研究指導を



行っております。また、全学共通科目を開講して京都大学の学部学生の教育にも貢献しております。この他、KUCA を用いて全国 12 大学の原子力工学系大学院生（京都大学学部学生を含む）を対象に 1 週間の実験教育コースを毎年数回行っており、かつ平成 15 年から韓国 6 大学、平成 18 年からスウェーデン 1 大学の学生にも実施しております。原子力人材育成が世界的にも重要視されている今日、本実験所はその一翼を担っており、国内外の原子力分野の人材育成に大きく寄与しています。

鈴木 実 教授

（粒子線腫瘍学研究センター・粒子線腫瘍学研究分野）

私の研究室は、ホウ素中性子捕捉療法 (Boron neutron capture therapy, 以下 BNCT) という研究用原子炉からの中性子を使用する放射線治療の基礎・臨床研究を行っています。新規治療法の開発研究は、医学研究者の使命です。BNCT は、ホウ素化学、中性子工学、加速器工学など多彩な研究分野が結集することにより前進可能な治療法です。原子炉実験所には、原子炉物理学、中性子工学、加速器工学、放射線生物学、医学物理学の研究室があり、設備的にも、中性子照射、γ線照射、陽子線照射実験が可能です。本実験所におけるこのソフト、ハードの面で充実した研究体制が、BNCT 研究を着実に進めていく原動力になっています。BNCT 研究のみならず、自然科学研究は、多分野の共同研究が必要です。京都大学原子炉実験所は、全国共同利用研究施設として設置された経緯から、各研究分野において、国内外に広がる研究ネットワークが構築されています。創造的かつ他分野と関連する有機的な研究に取り組みたいという学生諸君の参加を期待しています。



霊長類研究所

Primate Research Institute

▶▶ <http://www.pri.kyoto-u.ac.jp/>

研究

霊長類研究所は、ヒトを含む霊長類に関する総合的研究をおこなうことを目的に、全国の研究者の共同利用研究所として京都大学に附置され、1967年に愛知県犬山市に設立されました。現在、4つの研究部門（10分野）、および2つの附属研究施設があります。人間の本性とその進化的基盤を明らかにするため、霊長類の多様な種を対象に、ゲノムから生態まで幅広い視点から学際的研究をおこなっています。京都大学の伝統であるフィールドワークだけでなく、実験室での研究もおこなわれていて、共同利用・共同研究拠点として国内外の研究者が利用できる研究体制を整えています。



教育

霊長類研究所は、京都大学大学院理学研究科生物科学専攻の「霊長類学・野生動物系」として、大学院教育をおこなっており、大学院を有する国内唯一の霊長類学専門の研究教育機関です。ヒトを含む霊長類に関する総合的研究を継続的に推進・発展させるためには優れた若手研究者の養成が不可欠ですが、その教育目標は以下のような特色をもっています。

1. 修士課程から博士後期課程まで、広い視野に立った教育を志している。良好な研究環境を保ち、長期的な展望に立った研究の遂行を可能にする。多様な若い人材を受け入れることは研究所の活性化にもなり、留学生や有職者を含む多様な人材の博士編入にも門戸を開いている。

2. 講義や実習を充実して、文系・理系を問わず霊長類学全般に関する基礎知識を深め、体系的な学識を身につけてもらう。
3. セミナーや研究会あるいは学際的な共同研究を通じて、異なる専門領域の研究に接する機会を数多く提供し、専攻した学問領域だけに偏らない広い視野を育成する。
4. 2009年に国際共同先端研究センター（CICASP）が発足し、国際共同研究と英語による教育の充実を推進している。2013年から、霊長類学ワイルドライフサイエンスというリーディング大学院を、野生動物研究センターと協力して開始した。フィールドワークを基盤とした博士課程教育プログラムである。

黒澤 圭貴 さん

修士課程1年
(理学研究科・生物科学専攻)

霊長類研究所でおこなわれている研究は多岐に渡り、霊長類という1本の柱を軸に、フィールドからゲノムまで、多様な興味関心を持った研究者や大学院生が在籍しています。そのため、在籍者のバックグラウンドも幅広く、理系学部出身者はもちろん、文系学部の出身者も、自分の関心を生かした研究をおこなえる環境です。私自身も経済学部の出身であり、現在はチンパンジーの「こころ」の研究、特に「チンパンジーのリスク下の意思決定」をテーマにして、研究活動に励んでいます。また、外国人留学生が多く在籍していることも、霊長類研究所の特徴です。研究活動において、もはや英語は必要不可欠です。その中で、日常的に英語が飛び交う、国際色豊かな研究所の環境は、研究をおこなう上で恵まれた環境だと言えるでしょう。このように、日頃から学問領域や文化を越えた交流があり、多様な視点で物事を考えながら勉学に励むことが出来るのが、霊長類研究所です。



東南アジア研究所

Center for Southeast Asian Studies

▶▶ <http://www.cseas.kyoto-u.ac.jp/>

研究

東南アジア研究所には、21人の専任教員がおります。その専門は文理の8分野（法、経、文、工、農、理、医）にまたがります。スタッフの多様性と、各々の分野を超えて進めている共同研究の学際性が、研究所の特色であり強みとなっています。一例を紹介すれば、グローバルCOEプログラム「生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点」（杉原薫代表）があります。



このプログラムは、アジア・アフリカ地域の持続的発展に関する学際的研究を、グローバルで長期的な視野から多面的に行うために、2007年度から2011年度まで行いました。生存圏研究所などが進める「サステナビリティ学」の専門家とともに、先端の科学技術や知識を、伝統的な地域研究を支えてきた生態学、政治学、経済学、社会学、人類学、歴史学、医学などの知識と融合させることによって、革新的で実践的な地域研究を推進し、同時にその専門家や科学者の養成を行い、成果を全6巻の『講座・生存基盤論』（京都大学出版会2012）として刊行しました。この成果は、2011年度からスタートした東南アジア研究所特別経費プロジェクト「ライフとグリーンを基軸とする持続型社会発展研究のアジア展開—東アジア共同体構想を支える理念と人的ネットワークの強化—」にも引き継がれています。

また、毎年、半期に6名ずつの外国人研究員をお招きし、共同研究を進めることを通して、東南アジア研究の国際共同研究拠点として大きな役割を果たしています。

教育

東南アジア地域研究専攻の総合地域論講座を、研究所の8人のスタッフが担当しています。各自の専門は以下のように多彩です。清水（文化人類学）、水野（経済発展論）、

小泉（歴史学）、石川（社会人類学）、甲山（水文・気象学）、三重野（経済学）、小林（文化人類学）、中西（政治学）。そのほか、速水（社会人類学）と岡本（政治学）が地域変動論講座、西沢（病原細菌学）と安藤（熱帯農学）が生態環境論講座、松林（フィールド医学、老年医学）・河野（自然資源管理）・藤田（農業経済学）が持続型生存基盤論講座の一員です。また、松林と西沢が、医学部・医学研究科においても学部生・大学院生の指導をしています。研究所スタッフの多様な研究関心と方法論が、院生へのさまざまな刺激と示唆、助言と指導に役立っています。

後藤 直子 さん

博士課程1年
(アジア・アフリカ地域研究研究科・東南アジア地域研究専攻)

経済、技術、政治、教育などあらゆる側面で問題を抱えるインドネシア農村において、農民の農業生産活動の母体となる農民組織が、いかに自立し、自ら農業・農村を発展させていくということが極めて重要な課題となっています。私は、この農民組織の実態を調査するべく、2014年8月から2015年9月まで、インドネシアでフィールドワークを行います。現在は、インドネシアのボゴール農科大学の農業・農村開発センターにて、インドネシア人研究者との議論や、研究に関連するインドネシア語の文献の収集、ボゴール近辺の農村に赴くことによって自分のインドネシア農村に関する知識を深めています。また、調査で用いるインドネシア語、ジャワ語の勉強もしています。先日は、ボゴール農科大学が開催した国際学会にて発表しました。今後は、このボゴール農科大学で深められた農村のイメージを持って、実際に中部ジャワの農村で調査し、博士予備論文を執筆する予定です。

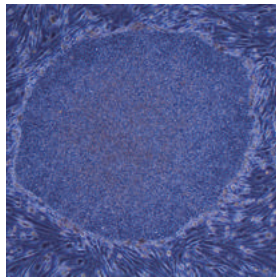


iPS 細胞研究所

Center for iPS Cell Research and Application

▶▶ <http://www.cira.kyoto-u.ac.jp/j/>

iPS細胞研究所(CiRA =サイラ)は、2010年4月に設立され、初代所長には、世界で初めてiPS細胞を樹立することに成功し、2012年にノーベル生理学・医学賞を受賞した山中伸弥教授が就任しています。前身は、2008年1月に物質・細胞統合システム拠点(iCeMS)内に組織されたiPS細胞研究センターです。iPS細胞研究所の主任研究者は初期化機構研究部門、増殖分化機構研究部門、臨床応用研究部門、基盤技術研究部門、上廣倫理研究部門に分かれて研究活動を行っています。主任研究者の3分の1は30代で、若い研究者の豊かで自由な発想を重視しています。



2010年2月に竣工した研究棟(地上5階、地下1階)には、動物実験施設や細胞調製施設(FiT: Facility for iPS Cell Therapy)を有しており、iPS細胞の基礎研究から医療応用を目指した前臨床および臨床研究までシームレスに実施できる体制となっています。また、研究エリアではオープンラボ形式を採用しており、研究者間のスムーズな情報・意見交換が期待できます。さらに、研究者が研究に専念できるように、独自に知的財産や契約などを管理するサポートチームも組織しています。

iPS細胞研究に特化した世界でも先駆的な研究機関として、iPS細胞研究所は難病や外傷で苦しんでいる世界中の大勢の人々に役立つ新しい治療法を開発するために、iPS細胞作製技術を用いて創薬や

再生医療を実現することを目標としています。



iPS細胞研究所では、医学研究科の一部として、初期化機構研究部門初期化制御学分野、増殖分化機構研究部門分化誘導研究分野、臨床応用研究部門疾患再現研究分野等の11分野で大学院教育を実施しています。また、iPS細胞研究基金等の外部資金を活用して若手研究者を受け入れています。再生医科学研究所、iCeMS、医学研究科、医学部附属病院と密接に連携しながら、共同研究の奨励と若手研究者の交流と育成に努めています。

島本 廉さん

特定研究員
(初期化機構研究部門)

マウスiPS細胞の樹立が2006年に報告されて以来、様々な改良が進められています。そして現在では、一部の疾患について臨床研究も始まっています。このような目覚ましい発展の一方で、まだまだ多くの課題が残されています。私が所属する初期化機構研究部門では、主にiPS細胞の誘導機構について研究を行っています。その中でも私は、DNAのメチル化制御に着目しています。体細胞からiPS細胞が出来てくる際に、DNAのメチル化やヒストン修飾といったエピジェネティックな修飾が書き換えられます。この現象はリプログラミングの本質であるにも関わらず、その機構はよく分かっていません。私はこの機構を明らかにすることで、高品質なiPS細胞を効率良く作ることを目指しています。CiRAはオープンラボであり、人の交流が盛んです。また、海外の研究者が多く、とても国際的です。このような素晴らしい環境の中で貴方も一緒に研究してみませんか？



教育研究施設

■全国共同利用施設

施設名	設置目的
学術情報メディアセンター (昭和44年4月開設)	情報基盤及び情報メディアの高度利用に関する研究開発を行い、教育研究等の高度化を支援するとともに、全国の大学その他の研究機関の研究者等の共同利用に供する。また、情報環境機構の行う業務を支援する。
放射線生物研究センター (昭和51年5月開設)	放射線の生物への影響に関する基礎的研究を行うとともに、全国の大学その他の研究機関の研究者の共同利用に供する。
生態学研究センター (平成3年4月開設)	生態学・生物多様性科学に関する研究を行うとともに、全国の大学その他の研究機関の研究者の共同利用に供する。
地域研究統合情報センター (平成18年4月開設)	地域研究に関する情報資源を統合し相関型地域研究を行うとともに、全国の大学その他の研究機関の研究者の共同利用に供する。
野生動物研究センター (平成20年4月開設)	野生動物に関する教育研究を行い、地球社会の調和ある共存に貢献するとともに、全国の大学その他の研究機関の研究者の共同利用に供する。

■学内共同教育研究施設

施設名	設置目的
高等教育研究開発推進センター (平成15年4月開設)	高等教育における教授法、教育課程、教育評価等、教授システムに関する実践的研究、ならびに本学の教育活動の改善について、専門的立場から助言および協力を行うとともに、その研究成果に基づき高等教育研究開発推進機構の行う業務を支援する。また、研究成果に基づいて有する教育内容および方法の改善に係る機能について、他の大学の利用に供する。
総合博物館 (平成9年4月開設)	学術標本資料の収集と収蔵、教育研究支援、研究成果の公開および学術標本資料の解析、学術的評価、情報化等の調査研究および研究資源アーカイブに関する各種資料の体系的な収集・保存・運用・これらに必要な調査研究を行う。
低温物質科学研究センター (平成14年4月開設)	液体窒素や液体ヘリウムなどの寒剤を安定的に供給し、低温科学の研究や教育を支援する。低温物質科学に関する独自の研究・教育を行うとともに、実験室・研究設備を共同利用に供する。また、環境安全保健機構の行う業務を支援する。
フィールド科学教育研究センター (平成15年4月開設)	森林生物圏、里域生物圏ならびに沿岸海洋生物圏をつなぐ現場教育とフィールド研究を行うとともに、学内および国内外からの共同利用に供する。
福井謙一記念研究センター (平成14年4月開設)	ノーベル化学賞を受賞された福井謙一博士の研究理念を継承し、基礎化学並びに関連する科学の諸分野に関する研究を進展させ、学術研究の向上を図る。
こころの未来研究センター (平成19年4月開設)	心理学、認知科学、脳科学、人文科学等の学際的研究拠点を構築し、人のこころに関する総合的研究を行う。
文化財総合研究センター (平成20年4月開設)	文化財の調査・保存・活用に関する総合的教育研究を行うとともに、京都大学敷地内の埋蔵文化財についての調査研究及びその保存のために必要な業務を行う。

■物質－細胞統合システム拠点	設 置 目 的
物質－細胞統合システム拠点 (平成 19 年 10 月開設)	物質科学と細胞科学を統合した新たな学際領域の創出を行う。
■その他の学内組織	設 置 目 的
健康科学センター (昭和 41 年 4 月開設)	学生及び職員の健康管理に関する専門的業務を行う。また、環境安全保険機構の行う業務を支援する。
学生総合支援センター (平成 25 年 8 月開設)	カウンセリングルーム、キャリアサポートルームおよび障害学生支援ルームからなり、学生等の修学上、適応上及び就労上の相談、苦情等への対応、就職支援及び障害のある学生の修学上等の支援等を行う。
大学文書館 (平成 12 年 11 月開設)	公文書等の管理に関する法律（平成 21 年法律第 66 号）に基づく特定歴史公文書等その他京都大学の歴史に係る各種の資料の収集、整理、保存、閲覧および調査研究を行う。
アフリカ地域研究資料センター (平成 8 年 4 月開設)	アフリカ地域の学術情報に関する国際学術誌の編集刊行、図書・地理情報・動植物標本・民族資料等の収集・整理・公開、公開研究会および公開シンポジウムの開催、国際学術協定等に基づく研究交流の推進、関連研究機関との情報交換を行う。
男女共同参画推進センター (平成 26 年 4 月開設)	研究者の交流、啓発・広報、育児・介護の支援、就労形態に関する調査その他、女性研究者の支援に関する業務を行う。
白眉センター (平成 21 年 9 月開設)	次世代研究者育成支援事業の企画運営を行うとともに、同事業により雇用する教員の受入部局との協議調整その他次世代研究者育成支援事業の円滑な実施に関し必要な事項を処理する。
学際融合教育研究推進センター (平成 22 年 3 月開設)	学際的な教育研究を推進するための支援を行う。
学術研究支援室 (平成 24 年 4 月開設)	研究者の研究活動の支援を行うとともに、本学における学術研究の推進を図るため、高度な専門知識・経験を有する「リサーチ・アドミニストレーター（URA）」により、研究者が研究活動に専念できる環境を整備し、研究プロジェクトの企画・運営・研究成果の社会還元を支援する。

協力講座一覧

各研究科では以下の研究所・教育研究施設等の教員から構成される協力講座を設けています。各研究所・教育研究施設において大学院学生として教育を受けることを希望される場合は、下記それぞれの協力講座を設けている大学院研究科に問い合わせ（89 ページ参照）、受入状況をご確認ください。（下表のほかにも協力講座を設けている研究科もあります。）

研究所	研究科	全国共同利用施設	研究科
化学研究所	理学研究科、医学研究科、薬学研究科、工学研究科、農学研究科、人間・環境学研究科、情報学研究科	学術情報メディアセンター	工学研究科、人間・環境学研究科、情報学研究科
人文科学研究所	文学研究科、人間・環境学研究科	放射線生物研究センター	医学研究科、人間・環境学研究科、生命科学研究科
再生医科学研究所	理学研究科、医学研究科、工学研究科、生命科学研究科	生態学研究センター	理学研究科
エネルギー理工学研究所	エネルギー科学研究科	野生動物研究センター	理学研究科
生存圏研究所	理学研究科、工学研究科、農学研究科、情報学研究科		
防災研究所	理学研究科、工学研究科、情報学研究科	学内共同教育研究施設	研究科
基礎物理学研究所	理学研究科	高等教育研究開発推進センター	教育学研究科、人間・環境学研究科
ウイルス研究所	理学研究科、医学研究科、薬学研究科、人間・環境学研究科、生命科学研究科	総合博物館	理学研究科
経済研究所	経済学研究科、情報学研究科	低温物質科学研究センター	理学研究科
数理解析研究所	理学研究科	フィールド科学教育研究センター	理学研究科、農学研究科
原子炉実験所	理学研究科、医学研究科、工学研究科、農学研究科、エネルギー科学研究科	福井謙一記念研究センター	工学研究科
霊長類学研究所	理学研究科	こころの未来研究センター	人間・環境学研究科
東南アジア研究所	医学研究科、アジア・アフリカ地域研究研究科		
iPS 細胞研究所	医学研究科	世界トップレベル研究拠点プログラム	研究科
		物質－細胞統合システム拠点	生命科学研究科
		その他の学内組織	研究科
		健康科学センター	医学研究科
		学際融合教育研究推進センター	工学研究科

研究所・附属研究施設等位置図



京都府内研究所・附属研究施設等位置図

京都市内を除く

